

鯉老いて真中を行く秋の暮

藤田湘子

鯉はその時たまたま群れの真中を泳いでいたにすぎないのだろうけれど、作者はそこに老いを感じた。五十五歳のときである。この年、湘子は国鉄を退職している。悠々と真中を行く鯉の姿に、王道を行く貫禄と共に少しの老いを感じてもおかしくないのかもしれない。

最近私はこの句に仏教の「中道」を感じるようになってきた。「中道」とは、まさに「真中を行く」こと。こだわらず、片寄らず、ゆつたりと何者にもとらわれず「随所作主」の境地。老いたればこそその真中なのであろう。昔は「老いて真中を行く」というフレーズがどこか好きになれなかったが、読む人の年代、器量、資質によつてさまざまに解釈できるところが、名句の所以なのかも。

1980年（55歳）第五句集『春祭』 鑑賞・野本京